国語科

漢詩文と世界史とのクロスカリキュラムについて
～国語と他教科科目・諸活動とのクロスの可能性を求めて～

三　島　　徹

【抄録】　平成14年度から実施される週５日制、並びに先に発表された新学習指導要領に伴い、各教科科目の授業時数は、自ずと縮減せざるを得なくなっている。また、国語科においては、表現の指導として当てるべき時数が具体的に明示されるなど、科目内での教材の取り扱いにも大幅な変更を余儀なくされている。しかし、現実には、教室において授けるべき指導内容の本質は決して変わりうるものではなく、精選と指導展開の工夫により、より効果的な展開を模索すべきであると考える。そこで、さしあたって取り組みうる工夫の一端として、『世界史Ｂ』の中の「東洋史」(黄河文明の誕生から唐まで）の授業展開に合わせて、『古典Ｉ』の漢詩文の授業展開を関連づけることにより、教科相互の展開の便をはかるとともに、学習者の理解のしやすさと定着をはかる方策を試みた。

【キーワード】　新指導要領・週５日制・世界史・クロスカリキュラム・総合力・生きる力・問題解決能力・表現

１　はじめに　テーマ設定の理由
～“生きる力”を培う学習指導の一端として～

本研究は、週５日制、並びに新学習指導要領に伴い、授業時数の縮減と教材の取り扱いなどに大幅な変更を余儀なくされている現実をふまえ、その来るべき時代への対応を模索すべく、教材の精選と指導展開の工夫を世界史と古典のクロスという観点から試みようとするものである。

したがって、先ずは新学習指導要領を概観し、試みを進めるべき方向性を探ることとする。

①　新指導要領の国語科の各科目

現　行		改　訂	
国語Ｉ	（４）	国語表現Ｉ	（２）
国語Ⅱ	（４）	国語表現Ⅱ	（２）
国語表現	（２）	国語総合	（４）
現代文	（４）	現代文	（４）
現代語	（２）	古典	（４）
古典Ｉ	（３）	古典講読	（２）
古典Ⅱ	（３）		
古典講読	（２）		

（　）は標準単位数

以上のように、科目名としても大幅な改定がなされたが、中でも、かつては国語Ｉという基本科目を基盤とする国語Ⅱ・現代文・古典Ｉの積み上げが明確であったのに対し、この度の指導要領では科目の積み上げに関する規定が取り払われた。また、国語表現Ｉと国語総合とが選択必須として挙げられているだけであり、このことは、学校裁量の幅が大きく認められ、特色ある学校作りの推進に対する強力な意思の表れとも言えよう。

②　単位数の削減

週５日制にともない、当然ながら週あたり時数は32時間から30時間へと削減されることになるが、それに加えて総合的な学習の時間が追加され、各教科科目への圧迫に一層の拍車をかけることとなった。このことは、先に挙げた国語科の各科目の改訂においても明確であるように、国語科の科目全体としての標準単位数も、組み合わせによってはかなり大幅な縮減にならざるを得ない。

③　表現指導の重視

また、新指導要領を読解するに、小説や随筆といった文学作品偏重の授業に対する懸念が示されるとともに、現代に生きる青少年層の言語や言語感覚の乱れ、さらには、高度情報社会といわれる現代社会への適応、また、総合学習の設定にも伴い、自ら切り開き、生きる力の育成を要請していることが読みとれる。

これらのことは、「国語総合」の「内容の取り扱い」における例示において、第２章、第１節、第２款、第３の３、（２）のウの(ウ）で、「話すこと・書くこと」として「課題について調べたり考えたりしたことを基にして、話し合いや討論などを行う」と例示し、第２章、第１節、第２款、第３の３、（３）のイの（ウ）で

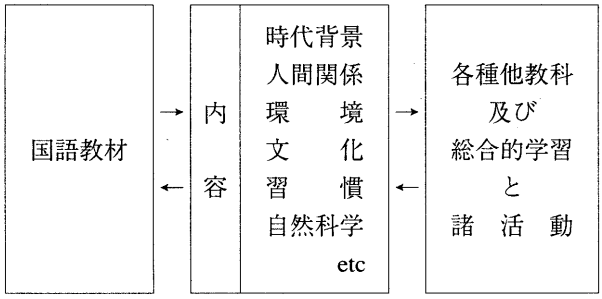
は、「書くこと」として「本を読んでその紹介を書いたり、課題について収集した情報を整理して記録や報告などを書いたりすること」と例示している。また、第２章、第１節、第２款、第３の３、（３）イの（ウ）では、「読むこと」として「課題に応じて必要な情報を読みとり、まとめて発表すること」と具体的に例示している。

そして、これらの指導内容について、配当単位字数も具体的に規定し、「話すこと・書くこと」を主とする指導には15単位時間程度を配当するものとし計画的に指導を行うこと（第２章、第１節、第２款、第３の３、（２）のア）とし、「書くこと」を主とする指導には30単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導を行うこと（第２章、第１節、第２款、第３の３、（３）のア）（「国語総合」の例）と明確に配当すべき時数を示している。

④　新学習指導要領の求めるもの

以上のことから、新学習指導要領が求める「力」とは何かを総合的に勘案すれば、「総合力＝生きる力＝問題解決能力」であると言えよう。これらの観点から、これからの教科指導には、単に教科としての知識の習得のみでなく、教科科目をも超えた興味・関心の発揚と、それに伴う「知識」と「知識」の結合・発展による基礎基本の定着が求められていよう。この意味でも、国語という科目の枠を超えて、他教科、ひいてはあらゆる活動の機会との連携を視点に入れた合科やクロスカリキュラムの可能性を引き出し、それによって相互の指導内容の融通を行うことで、幾らかでも指導内容の精選と発展定着をはかる必要があると言える。

⑤　国語教材から見た他教科との連携の可能性



とりわけ国語や英語は、その教材の関わる内容が多岐に富んでいる場合が多い。小説においては当然時代背景や環境など、避けては通れないものであるし、論説文においても、それが歴史や文化、科学性を帯びたものであり得ることは論を待たない。また、地域の行事や家族との行楽の中で培われた知識が、教材読解の支えになることさえ珍しくないのである。これが、詩などの文学的作品になれば、言語と体験との関わりが豊かな鑑賞につながる例は枚挙に暇がない。このように、本来教材というものはさまざまな学習や体験に裏付けられて理解されるものであり、またその繰り返しの中で、フィードバックされ、定着もされるものであると言える。したがって、あらゆる機会とあらゆる過程をとらえて、さまざまな学習の連携とクロスは可能であると言えよう。

⑥　各教科との連携の意義

ｉ「なぜ学ぶのか」に応える

すでに述べたように、教科の内容は他のさまざまな学習や体験と連携しうるが、とりわけ学習活動における際の意識付けは重要である。

どの教科のどの単元においても、その始めに単元の目標が明示され、何をどのように学び、どんな力を身につけるべきかが述べられよう。この時、説明される学習内容が、どんなことと関連し、どんな発展の可能性があるのかが明示されたならば（あるいはそれを学習後に理解した場合でも）、学習者の興味・関心はより強く引き出されるものと思われる。この強い興味・関心こそが、学習の定着と以後の学習の発展を支えるものである。

これから求められる「力」が、

「総合力＝生きる力＝問題解決能力」

であるならば、「学習課程」そのものは

「課題→学習・調査・理解・整理→
記録・発表→定着」

という従来の形であるにせよ、その過程の中においては、それぞれの知識としての単なる個々の積み上げでなく、知識と知識を相互に関連させる中で、総合的な把握につながることを学習者に積極的に意識させ、体感させることが必要であろう。このことが、学習に対する興味・関心の喚起＝「学ぶ」ことの意義を自覚的に認識させることになると思われるのである。

2　漢詩文と東洋史
～最も連携しやすいものとして～

①　現行指導要領でのクロス（名大附を例として）

本試みは、新学習指導要領実施に向けて、さしあたって可能と考えられる指導内容の精選としての試みるものである。したがって、名大附における原稿のカリキュラムにおいて可能であることを条件として考察した。

i「世界史B」と「古典Ⅰ」を例として

名大附の現行カリキュラムにおける世界史Bと古典Ⅰの状況、及びクロスの可能性は以下の通りである。

ア　両科目の該当分野配当単位時間

「世界史B」4単位

内、東洋史（唐まで）の配当時間11単位時間程度

「古典Ⅰ」2単位

内、漢詩文の配当時間25単位時間程度

イ　クロス可能な単位時間

「世界史B」の東洋史の配当時間に合わせる形で、「古典Ⅰ」の該当教材を積極的にクロスさせる。

ウ　使用教科書

「世界史B」　『高校世界史B』新訂版　実教出版

「古典Ⅰ」　『古典Ⅰ』東京書籍

エ　教材（単元）と学習単位時間

	世界史B			古典Ⅰ
	単元	単位時間		単元
a	第5章　東アジア世界と内陸アジア 1　中国文明の形勢 東アジア世界（地理的概説） 中国文明の誕生	1	1	漢文編 一　小話を読む 晏子之御（史記） 先従隗始（十八史略）
b	殷と周 春秋戦国時代 諸子百家	1	2	四　中国の思想・人間論 性相近也（論語） 不忍人之心（孟子） 人之性悪（荀子） 無用之用（老子）
c	2　秦・漢の中国統一 秦の中国統一	1		
d	前漢 新と後漢	1	2	三　史記の世界 鴻門之会 四面楚歌 項王自刎
e	秦・漢時代の文化	1		
f	3　中国の分裂と南北の対立 魏晋南北朝時代 魏晋南北朝時代の文化	1	2	五　古詩を味わう 桃夭（詩経） 行行重行行（文選） 去者日以疎（文選） 飲酒（陶潜） （漢詩概説）
g	4　内陸アジア 内陸アジアの自然と社会 オアシス都市国家 騎馬民族国家 トルコ系諸民族の活動	1		
h	5　隋・唐帝国と東アジア 隋の中国統一	1	3	二　唐詩を味わう 雑詩（王維） 芙蓉楼送辛漸（王昌齢） 逢入京使（岑参） 旅夜書懐（杜甫） 黄鶴楼（崔顥） 送僧帰日本（銭起） 六　文章を味わう 送薛存義（柳宗元）
i	唐帝国 社会の変化と唐の滅亡	1		
j	唐の文化	1		
k	吐谷渾・吐蕃と南詔 朝鮮と渤海 日本	1	1	兵車行
	計	11	11	計

ii「古典Ⅰ」教材の選択

教科書教材と選択した教材（〰部が選択教材）

漢文編

一　小話を読む

・晏子之御（史記）・先従隗始（十八史略）

・不死之薬（韓非子）・蘇武持節（十八史略）

・漱石枕流（世説新語）・野中兼山（先哲叢談）

二　唐詩を味わう

・宿建徳江（孟浩然）・雑詩（王維）

・怨情（李白）・秋夜寄丘員外（韋応物）

・芙蓉楼送辛漸（王昌齢）

・逢入京使（岑参）・楓橋夜泊（張継）

・送別（杜牧）・夜雨寄北（李商隠）

・杜少府之任蜀州（王勃）・旅夜書懐（杜甫）

・送僧　・帰日本（銭起）・草（白居易）

・黄鶴楼（崔顥）・遊子吟（孟郊）

・兵車行

三　史記の世界

鴻門之会　・四面楚歌　・項王自刎

四　中国の思想

人間論

・性相近也（論語）

・不忍人之心（孟子）・人之性悪（荀子）

・無用之用（老子）・曳尾於塗中（荘子）

政治論

・礼之用、和爲貴（論語）

・無恒産無恒心（孟子）・無為之治（老子）

・侵官之害（韓非子）

五　古詩を味わう

・桃夭（詩経）・碩鼠（詩経）

・行行重行行（文選）・去者日以疎（文選）

・飲酒（陶潜）・責子（陶潜）

・敕勒歌（楽府詩集）

六　文章を味わう

・漁父辞（屈原）・桃花源記（陶潜）

・送薛存義（柳宗元）

七　日本の漢詩文

詩　四首

・五言、臨終一絶（大津皇子）

・山家（絶海中津）

・桂林荘雑詠示諸生（広瀬淡窓）

・題自画（夏目漱石）

語録　二編

・人非聖人（貝原益軒）・渉世之道（佐藤一斎）

信玄と謙信　頼山陽

・所争不在米塩（日本外史）

・諸将服信玄（日本外史）

iii 教材選択の理由

～世界史の展開に合わせて～

世界史Ｂの学習の内、東洋史（特に中国の唐まで）を学習するのが夏休み後にあたることを教科担当者との打ち合わせから知り、古典Ⅰの該当教材を、世界史のそれにタイアップさせる形で展開すべく考えた。その結果、

ア　漢文・漢詩の各分野をできるだけ網羅するよう古典Ⅰの教材を選択する。

イ　歴史の背景を理解するにふさわしい教材を選択する。

ウ　世界史とのクロスの配当時間は、世界史側の小単元の展開に一致させる。

エ　世界史の小単元にクロスさせる教材は、教科書教材の内、できるだけジャンルを網羅するように選択する。

などのような条件をもとに前述の教材を選択した。もちろん、世界史の関連単元に対する配当時間が11単位であるので、古典Ⅰの教材の量は全く不十分であるが、ここで眼目とすべきは、これらの取り組みで漢文の基本句法の細々とした事項までを修得させることではなく、世界史の学習における文化面の支えを構築すると共に、古典Ⅰの学習における歴史的背景などの支えを構築することにあり、さらには、世界史の学習と古典の学習を関連づけることによって、知識と知識の連結の実際を体験させ、学ぶことの興味・関心を少しでも引き出すことにある。また、このようなクロスの取り組みにより、教科相互の指導内容の精選と縮減をはかることも眼目のひとつであるから、ここで選択しなかった教材は、当然他の機会に取り扱うことになる。むしろ、現実の問題として通常の授業として展開した場合、ここで選択した教材が11単位で指導しきれる量でないことは明白であり、その具体的運用が問題であると言える。

3　学習の展開

①　限られた時間の中で

以上のように、限られた時間の中でそれ相当の教材をこなすことは、かえって生徒の負担が増加し、興味・関心を減退させかねない恐れもあるが、その運用を工夫することで乗り越えなければならないと考える。

たとえば、新学習指導要領では「古典教材については（中略）時には書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること（第２章、第１節、第２款、第５の３、（５）のエ）」・「古典講読教材は（中略）古典の現代語訳などを適切な範囲で関連的に取り上げることが

できる（第２章、第１節、第２款、第６の３、（５））」として、書き下し文・現代語訳が「参考」としてだけでなく、教材として取り上げることができると明記している。教材のこのような運用は、内容理解や古典に親しむことを優先させる上で効果的であり、漢詩・漢文を「読む」ことに終始するあまり、学習者に解釈と暗記に振り回されるという感覚を抱かせずに済むというものである。

②　指導の展開

特にクロス教材の学習では、文法・語彙の修得は必要最低限とし（他の機会にフィードバックするなど、方策は工夫できる）、世界史で学習した歴史的背景を手掛かりに、その時代に生きた人々の息吹を体感することを明確に示すなど、学習（授業）の指針を学習者に特に明示して、ある意味での安心感と学習の方向付けを与えるべきであると考える。

また、設定した単元や教材に応じて、プリントなどを活用し、書き下し文・現代語訳・論の展開図・単元のまとめ・参考（比較）資料など、予め提示できるものは提示して、学習進行の便をはかる必要がある。

また、学習者が従来体験してきた授業展開とは自ずと異なるので、学習者（学習者個別、またはグループ）の参加を実感させる展開を心掛ける必要もある。この点からも、必要に応じて事前学習（予習）を具体的に指示したり、学習課題を与えることは重要であろう。とりわけ、世界史での学習事項や世界史資料集を活用したレポートの提出や発表を活用することは、学校図書館を利用しての調査やそのまとめと発表の学習（表現の領域とも関連）につながると共に、世界史の理解と漢詩文への興味・関心の喚起に役立ち、クロスの試みに一致するものと考える。このような学習活動を取り入れることにより、生徒の活動を最大限に生かしつつ、限られた時間での学習展開が可能になると考えられる。これらの活動は、以下のような関連図として説明できよう。

世界史	歴史の体系的理解……縦のつながり
漢詩文	作品の理解・鑑賞……横のつながり

↓

歴史（時間）という縦の流れを一時留めて、その時代に躍動する人間の息吹（漢詩文）を実感させる最も簡便な機会。

↓

縦と横、点と線……知識と知識の統合

↓

一見、個別に見えがちな知的事項が結合し、総合的視野を獲得する瞬間を実感させる

↓

「なぜ学ぶのか」に応える

↓

学習に対する興味・関心の喚起。知識の定着

4　国語科と他領域とのクロスの将来性と課題

以上のように、さしあたって可能であると思われる漢詩文と世界史とのクロスを考察したが、以下は国語科という立場から他領域とのクロスの可能性について考察を進める。

①　新学習指導要領に見る新科目の内容と可能性

i「国語表現Ⅰ・Ⅱ」

現行の「現代語」と「国語表現」を組み合わせて再構成したものであり、「伝え合う力」「思考力・言語感覚」を伸ばすことが目標の中心となっている。標準単位的に見ても、他教科科目とのクロスを大幅に取り入れることは有意義であると考えられる。しかし、例えば教科書所収の漢詩文教材の量的質的確保がどこまで期待できるかの不安は残る。独自に活用すべき教材の開発が必要となる可能性がある。現代文分野などにおいては、例えば表現などにおいて、「言語活動例」として「自分の考えを明確にして、スピーチ、発表、討論などを行うこと。観察したことや調査したことを記録したり、まとめて報告したりすること。相手や目的に応じて、案内、紹介、連絡などのための話をしたり文章を書いたりすること（第２章、第１節、第２款、第１の３、・アからエ）」と明記されているので、他の領域（他教科科目・総合的学習・特別活動など）と大いにクロスすべき単元や指導内容となり得るものと考えられる。

ii　国語総合

新指導要領における目標の文言は現行の「国語Ⅰ」と同一であるが、表現の指導について、配当時間の具体的単位時間を明記し、また、標準単位から見て、全単位時間の７割弱は読むことの指導であり、近代以降の作品と古典の比率は偏らないこと、又、古典教材中の古文と漢文の比率も偏らないこととされているので、漢詩文と世界史のクロスはもちろん、

表現・近代以降の作品と他教科科目とのクロスも比較的しやすいものと思われる。

iii 古典・古典講読

これらの教科は、教材の内容、量ともに、世界史・日本史とのクロスは容易と思われる。しかし、これらの科目は選択科目であり、学習者の選択上、他教科科目とどのような組み合わせで選択されているかにより、直接的クロスは困難となる可能性がある。この場合、前学年までに学習した他教科科目を掘り起こす形での展開が考えられよう。また、世界史(または日本史）選択者が古典教材の漢詩文（または古文）をクロス的に活用して学習するという、他教科科目からのクロスも考えられてしかるべきである。

② 他の実践例と今後の課題
～他領域との互換・関連を探るために～

授業単位数の確保は、単に国語科だけに迫られた問題ではなく、総授業時数の縮減である以上はすべての教育活動に関わる問題としてとらえなければならない。したがって、国語科としての３年間ではなく、他教科科目・特別活動・総合的学習などとの関連を全校的、全課程的に想定した学習指導計画の工夫が迫られていると言えよう。

i　特別活動（学校行事）との例

本校では、憲法記念日の前後に憲法講演会が実施される。この行事にクロスさせて、国語表現では「要約文」「要旨」「感想文」の学習を実施した（99年度、高校３年Ｃ組対象)。その主な展開は以下の通りである。

憲法講演会
→　表現（聞く・まとめる・発表するの領域）
展　開
　事前学習＝要約文・要旨のまとめ方の指導
　当　　日＝聞く・メモを取る
　事後学習＝要約文を書く（宿題）
　　要旨をまとめる
　　（発表しあうことで自己点検をする）
　　感想文を書く
　　（発表による相互評価・自己評価）

この取り組みのポイントは、事前学習で要約文・要旨のまとめ方について学習し、講演会を聞きながら実際にメモを取り、課題学習として要約文を書いてくることが第１段階である。次いで学習者はその要約文をもって授業に参加し、各自の要約文から要旨をまとめた後、グループ内で発表しあって過不足を訂正し、それによって要約・要旨のまとめ方の自己点検をすることまでが第２段階である。さらに学習者は自分の要約文や要旨をもとに、自由な発想で感想文を書き、それを発表し合うことで相互の発想や感性のすばらしさに触れると共に、自己評価・相互評価をして終了する。こうして学校行事を有機的に取り込むことで、生徒の興味関心を引き出すことができた。この授業は、講演会を前後して全４時間を配当したが、生徒の活気ある活動が見られた。

ii　総合的学習との例

先にも記したが、本校では総合学習の時間として総合人間科が設けられている。この学習では、中学１年次からフィールドワークの学習が取り入れられているが、この取り組みに関連して依頼状・連絡文・礼状などの手紙文の学習が先行的に必要となる。

フィールドワーク
→　依頼状・連絡文・礼状を書く
展　開
　事前学習＝手紙の書き方の指導
　　（並行して訪問先にアポをとる）
　　依頼状・連絡文を作成する。
　当　　日＝フィールドワーク
　事後学習＝礼状を作成する

この場合も、国語科が授業の中の表現指導の一環として事前に指導し、総合人間科の活動の中でフィードバックし活用することで定着するという過程が実践される。

iii　今後の課題
　～国語の学習から他教科への展開の工夫～

情報の読みとり・整理・レポートの作成・討論・発表など、国語で学習したことを他教科科目など他の場面に活用する工夫も不可欠である。国語科の指導計画がどのようであるのかを他教科に理解してもらい、その学習成果を活用してもらうことは学習者の知識や技術の定着だけでなく、繰り返し述べてきた知識と知識の統合に大いに役立つことである。

また、このことは「なぜ学ぶのか」に応えることの一端でもあり、それぞれの学習時点で身につけた事柄が、他教科科目間・諸活動に活かされるという実感を体得させる工夫にもつながると言える。

5　まとめ

以上、実践例と今後の課題について述べたが、クロスの必要性は、本研究において主に述べたような、授業時数縮減や指導内容精選に伴うことだけがその理由ではない。むしろクロス的発想の必然性を発展的にとらえることにより、学習者の知識と知識の統合の機会をはかり、学ぶことの楽しさや興味・関心の発揚をはかることにあると言えよう。したがって、先に述べた指導内容の相互乗り込みによる授業時数縮減対策とする発想は、実は２次的副産物であるといわねばならない。また、すでに述べたように選択科目の配置の問題や各科目の指導計画上の問題など、クロスの条件は限りなく複雑であり、いきおい困難を極めるように考えられよう。しかし、可能な限りのクロスを積極的に試みることは、学習者の興味関心の発揚において、大いに効果的であることは日常の教科指導で明白である。たとえば、各教科間の指導計画を相互に理解し合い、指導過程のひと言として触れるだけでも学習者の反応は異なると考えるものである。